

文理混合型学部における卒業研究のテーマ設定のプロセス

The Problem-Finding Process for Graduate Research in a Cross-Disciplinary Faculty

縣 拓充
Takumitsu Agata

千葉大学
Chiba University
agata@chiba-u.jp

概要

本研究では、文理混合・多分野横断による課題解決型のカリキュラムにおいて、学生たちがどのように卒業研究を進めているかを、特に問題発見や課題設定の段階に着目して検討を行った。質問紙調査、並びにインタビューによる検証の結果、多くの学生たちが、自らもともと有していた興味・関心をもとに課題を探索・設定していた一方で、特定領域のアプローチに依拠した研究になりがちであることも示唆された。

キーワード：大学教育、問題発見、課題設定、学際研究

1. はじめに

近年、VUCA 時代に求められる人材の育成を視野に入れ、「課題発見力・課題解決力」に重きを置いた大学教育の取り組みが増加している。そこではしばしば、実際の社会課題に対応するために、特定の学問領域ではなく、文理を問わない領域横断・分野混合によるカリキュラムが組まれる。例えば文部科学省はこのような取り組みを推進するため、令和2年度より、「知識集約型社会を支える人材育成事業」を開始した。

そのようなカリキュラム下では、当然ながら特定領域の専門性を体系的に身につけることには限界がある。従来は、例えば心理学であれば、基本的な領域知識とともに、一連の方法論や分析方法について学び、その上で、4年次に卒業研究に取り組む。しかし、多分野横断のカリキュラムでは、多様な学問領域を広く学ぶことができる一方で、特定領域の知識や方法論を網羅的に身につけることはない中で、研究を行っていくことが求められる。

それでは、そのような学部における卒業研究において、学生たちはどのようにテーマを設定し、相応しいアプローチを選び取り、研究を進めているのであろうか。

創造活動に関しては、問題解決の過程と同様、あるいはそれ以上に、いかに新しく面白い問題を見つけるか、すなわち「問題発見」の重要性が高い[1]。またライティング支援に関わる研究からは、問題の設定や定式化の難しさが指摘されてきた[2]。そこで本研究では、

卒業研究の一連のプロセスの中でも、問題をいかに発見・設定するかという段階に着目する。

本研究では、筆者が所属し、文理混合による課題解決型（イシューベース）の教育を特徴とする千葉大学国際教養学部の「メジャープロジェクト」（卒業研究・卒業制作）を対象に、そこで学生たちがどのようなことを参照しながら、どのような問題（イシュー）に着目し、どのようなプロセスでテーマやアプローチを決定しているのか、またそれらは設定した領域ごとにどのように異なっているのかについて検討を行う。

2. 方法

2022年度の千葉大学国際教養学部の4年生を対象に、質問紙調査、及び、インタビュー調査を行った。

質問紙調査は、メジャープロジェクトの論文提出後の2023年1月に、google formを用いて行い、ほぼ卒業生全員である85名が回答した。質問紙調査の中では、領域の分類や用いた方法論などとともに、テーマが決まった時期、そこに影響を与えた出来事、教員の支援などについて回答を求めた。

インタビューは、学部内のメールや上述のアンケートの中で協力者を募り、2022年10月から2023年2月にかけて、著者が個別に実施した。インタビューは11名程度で、所要時間は1時間程度であった。インタビューの中では、メジャープロジェクトを進める一連の過程や取り組むテーマの変遷、そこに影響した要因などについて、時系列に沿って詳しく尋ねた。

3. 結果と考察

メジャープロジェクトの内容

質問紙調査の結果から、多く取り組まれた研究テーマのカテゴリを表1に、頻繁に用いられていた研究アプローチ（複数選択可）を表2に示す。2つの表から分かるように、研究テーマとしては「教育・学修」、表

象・文化・ことば」,「地域・コミュニティ開発・居場所」の順に多く,また「文献調査」「インタビュー」「質問紙調査」「フィールドワーク」といったアプローチがよく採用されていたことが分かる。これらのことから,文理混合の学部とは言え,人文・社会科学系に関わるテーマやアプローチが多くを占めていたことを見て取ることができる。他方で,自然科学系のテーマや,実験というアプローチを用いたものは,少数にとどまったと言える。

また,イシュー,アプローチともに学際的な研究だと報告した割合は17.6%,取りあげたイシューは学際的であるものの,手法やアプローチは特定の領域のものであると報告した割合は62.4%であった。同様に,レビュー・参照した文献について,67.1%の学生が,基本的には単一領域のものであると回答しており,問題の設定後は,一つの領域からの研究を進めていった割合が高いことが分かる。

表1 メジャープロジェクトの研究領域

カテゴリ	人数 (割合)
教育・学修	19 (22.4%)
表象・文化・ことば	13 (15.3%)
地域・コミュニティ開発・居場所	11 (12.9%)
認知・行動・心理	9 (10.6%)
制度・政策・政治・経済	8 (9.4%)
自然・環境・くらし	7 (8.2%)
ジェンダー・セクシャリティ	6 (7.1%)
コミュニケーション・情報	4 (4.7%)

表2 学生が採用した研究アプローチ

カテゴリ	人数 (割合)
文献調査	71 (83.5%)
インタビュー, 聞き取り調査	39 (45.9%)
質問紙調査 (アンケート)	28 (32.9%)
フィールドワーク, 観察	16 (18.8%)
事例研究, 症例研究	15 (17.6%)
歴史・制度研究	13 (15.3%)
制作, 商品開発, デザイン	12 (14.1%)
実験室実験	5 (5.9%)

問題設定の時期

メジャープロジェクトのテーマが決定した時期として,3年生前期(27%),3年生後期(41%),4年生前期(25%)がほとんどを占めていた。この学部におい

て,指導教員のもとで進めていく演習の授業は3年次後期に始まる。それゆえ,この授業以降に,指導教員とのやり取りの中でテーマが定まっていた学生の割合が高いことが示唆される。一方で,約3分の1はそれ以前より取り組みたいテーマが決まっていた様子である。

課題設定に際して,基本的には学生自身で探索・設定したと回答した割合は82%であり,ほとんどの学生が教員のアドバイスを受けてつも,自らの興味・関心に基づいて課題設定をしていたことが示唆された。

課題設定のソース

課題設定をする上で影響を受けたもの(複数選択可)として,回答割合が高かったものを表3に示す。

表3より,もともと学生が有していた趣味や興味からテーマを選択した割合が最も高いことが分かる。なおこの中には,当初から問題を設定して取り組まれたケースとともに,様々な試行錯誤を経て,最終的に自らがもともと関心を抱いていた内容に着地したケースも含まれる。また授業としては,2年次以降の専門科目の影響を受けたという割合が最も高かったが,その割合は31.8%に止まった。すなわち,正課のカリキュラムの中で学んだことをソースにテーマが決まった学生は必ずしも多くないと言える。

表3 課題の設定に影響したもの

カテゴリ	人数 (割合)
もともとの趣味や興味	41 (48.2%)
ニュースや報道, 記事	17 (20.0%)
高校までの経験	13 (15.3%)
一般教養の授業	17 (20.0%)
1年次必修の入門科目	13 (15.3%)
2年次から受ける専門科目	27 (31.8%)
卒業研究に関わる科目	30 (35.2%)
留学の経験	12 (14.1%)
教員とのやり取り	28 (32.9%)
友人や家族とのやり取り	19 (22.4%)

領域ごとの比較

国際教養学部は,3年次より「グローバルスタディーズ」(34名),「現代日本学」(43名),「総合科学」(8名)という3つのメジャーに分かれる。この3群で比較すると,総合科学メジャーに所属する学生に,イシューやアプローチともに学際的な研究だと回答した者

はいなかった。また問題設定に際して、自分で決定できず教員に頼ったと回答した割合は、総合科学メジャーが最も高かった。自然科学の色合いが強い研究において、学生が問いの設定に苦勞していたことが示唆される。

インタビューデータの分析

インタビューデータから、より詳細な問題発見のプロセスの検証を行った。その結果、基本的にはどの学生も単線的にテーマを選択しているのではなく、試行錯誤の中で探索している過程が明らかになった。また、ほとんどの教員が自ら研究テーマを提供することはせず、学生の自主性を尊重し、アドバイスを提供するような役割を担っていることが示唆された。

他方で、実験系のアプローチを採用した学生は、自ら問いを設定することが難しく、また授業外での実験機材や手法に関するサポートをより必要とすることから、教員との共同研究という形で進行したケースも見られた。

4. 結論

本研究では、領域横断・分野混合型のカリキュラムにおいて、学生がどのように卒業研究のテーマを設定しているかについて、千葉大学国際教養学部の4年生を対象とした質問紙調査、並びにインタビューから検証を行った。

その結果、問題発見や課題の設定に際しては、教員のアドバイスを受けつつも、多くの場合は学生自身が自らの興味や課題意識に基づいて進めていたことが明らかになった。その際、卒業研究に関わるメジャー科目を除けば、授業が課題を設定する上での主要なソースとなっていない可能性も示唆された。また、学際的な研究が推奨されている一方で、研究アプローチは特定領域に依拠したものになりがちであることも明らかになった。これらの知見を基に、学際的な問題解決型の取組を促すようなカリキュラム、あるいは支援の仕組みをより整えていくことが望まれる。

なお本研究はあくまで一つの学部のケーススタディに止まるため、他の大学の事例などと比較・参照する必要が指摘される。

文献

[1] Getzels, J. W., & Csikszentmihalyi, M. (1976). The creative

vision A longitudinal study of problem finding in art. New York: John Wiley & Sons.

[2] 鈴木宏昭 (2009). 学びあいが生み出す書く力：大学におけるレポートライティング教育の試み 丸善プラネット